

小林一茶の家族の描写と説経節

中田雅敏

Kobayashi Issa's Family Description and Sekkyo-bushi

キーワード：祖母、父母、子供、説経節、愛児の死

近世文学作品の中で、肉親の愛憎や家庭と家族、愛と死を扱った作品は極めて少ない。師や門人、親友等に関する型どおりの終焉記は数あるが、小林一茶のように近代自我意識を前面に押し出し、最も切実である肉親や家族の愛や死別をテーマにして書かれた濃密な作品は全くない。

小林一茶だけが、父も母も祖母もその死と、そうした人から受けた恩愛とを書き記している。その代表作が『父の終焉日記』と『おらが春』といえよう。最愛の父と娘に対する懇ろな追悼記である。一茶はなぜこのように家庭や家族、肉親の愛と死を作品として近代人に近い感性を持って描いたのであろう。特に『おらが春』に描かれた長女「さと」に寄せる家族愛と親としての情愛、そして死別に際しての悲しみの表出は「近代の親子」の姿そのものとして描かれている。「さと」の誕生から死に到るまでは、今でも戦前の女学校を卒業した方は暗唱していらっしやる方もいる。相馬御風や萩原井泉水、会津八一、勝峰晋風等によって、積極的に紹介されていった一茶が、大正デモクラシーの風潮を背景にした新しい教育運動の流れの中で、人間の生への妄執とその悲劇を克明に描いた『父の終焉日記』や子供への純愛を赤裸々に示した『おらが春』収録の「添乳」の一節などが積極的に教材化されることによって一般に読まれるようになったからなのである。

昭和十年代の国定教科書には、「国土・郷土礼賛の農民詩人」としての

一茶像が、「雀の子そこのけそこのけお馬が通る」（八番日記）や「やれ打つな蠅が手をすり足をする」（梅塵八番）などの童謡的な句と共に採録された経緯からそうした像が導かれてゆくのである。戦後は「博愛主義者」、弱者への慈愛を示す句を詠んで人間愛に溢れた国民詩人として戦後の教科書『高等国文近世篇』（昭和二十四年刊）に『父の終焉日記』から「みとり日記」が、『おらが春』から「添乳」などが載せられ再び高い評価を受けたからでもあった。一茶像の時代状況に応じた作品のカノン化については渡辺弘氏の著書と業績に顕著に述べられている。ここでは一茶の肉親、家族の個々に対する愛と死の実際について述べることにする。

一、祖母と母

一茶の母「くに」は、一茶が数え年三歳の時に病死したために一茶自身も臍氣にしか記憶していない。母は柏原の支村仁之倉（現信濃町仁之倉）の村役人筋に当たる宮沢家の出身で、当時でいう村の家格からすると小林家よりは高かったようである。母の性格等は良くわからないが、明和二年（一七六五）八月に没した。恐らく二十歳ぐらいだったようである。一茶が柏原に帰住した折り有力な味方となって擁護してくれた徳左衛門は、一茶とは従兄弟の関係であったらしい。宮沢家の過去帳には徳左衛門と称し

た人は、初代、二代、五代の三人がいる。そのため一説には叔父とする説もある。宮沢家で保管されていた一茶関係資料「熟談書付之事」「一茶預り金覚書」「新增日本道中行程記大全」などは現在は一茶記念館に預けられている。母が亡くなると父は一茶が八歳の時に倉井村(上水内郡三水村)から「さつ」という女性を後妻に迎えている。「さつ」が嫁いで二年後に弟仙六が誕生した。享和元年(一八〇一)五月二十一日に父が没した後には書かれた『父の終焉日記』にはそのいきさつの詳細が書かれている。

この文章は柏原帰任に際して弟仙六との遺産分配をめぐるいがみ合いの最中に書かれたものであるから相当な誇張があると見てよい。母のかわりになって幼少の一茶を庇護したのは祖母「かな」であった。『父の終焉日記』に継母との因縁やいざこざを書いた一茶であったが、漂泊生活を続けるに從って生母への思慕と亡き母に対するイメージは次第に神聖なものになっていっている。「亡き母や海見る度に見る度に」という句は、文化九年(一八一三)三月に江戸から富津に向かう途中に詠まれた句であるが、少年時代に故郷を出て長い長い放浪生活を送り、五十歳にしてまだ妻子や家もない一人身の寂しさを詠んでいる。広大無辺な海を見てみると、ああ母が生きてくれていたなら、という思いが胸にこみ上げてくるのだよという意味の句で、はるかな母への慕情が伝わってくる。洋の東西を問わず文学ではしばしば母性は海に譬えられている。「見る度に見る度に」と豊語を繰り返した後の省略に「思い出される」という一茶の慕情が込められた真情が迫ってくる秀句である。

母のかわりになって幼少の一茶を擁護したのは祖母のかなであるが、安永五年(一七七八)八月十四日に六十六歳で他界している。一茶は文化五年(一八〇八)七月に祖母の三十三回忌に帰郷し祖母の恩愛の情に対して次のように書き残している。

おのれ三歳の時、母のおやハ見まかりぬ。老婆不憫がりて、むつきの汚らはしきもいとはず、明暮背に負ひ、懐に抱きて人に腰を曲げて乳を貰ひ、又首を下げて葉を乞つつ育てけるに、竹の子のうき節茂き世の中

をもしらで、づかづか伸ける。しかるに八才といふ時、後の母来りぬ。其母、茨のいらいらしき行迹、山おろしのはげしき怒りをも、老婆袖となり垣となりて助けましませバこそ、首に雪をいたぐ迄、露の命消へ残りて、故郷の空の月をも見ぬ。誠にけふの法筵に逢ふことのうれしく、ありがたく、かくいふけふをさへ老婆の守り給ふにや。

秋風や仏に近き年の程

一茶

(『文化五・六年旬日記』)

一茶は享和元年三月に帰郷を思い立って帰国をした。たまたま父が悪性の傷寒にかかり一ヶ月ほどの病臥の後に六十九歳で世を去った。『父の終焉日記』は其の時の看病の手記で、四月二十三日の発病から筆をおこして五月二十一日の臨終を経て、二十八日の初七日にいたる三十四日間の経緯が詳しく記述されている。日記体の構成をとっているが、緊密な構成を持ち内容もかなり整備されている点から考えると、父の没後相当の日時を経て執筆されたものと見られている。(注1)一説には文化六年(一八〇九)に書かれたとする説もある。祖母の三十三回忌の翌年ということになる。自筆稿本は久保田ひろ志氏が所蔵されているが、原本は無題で「父の終焉日記」「父の臨終記」「看病日記」「みとり日記」などの名称で呼ばれているが、束松露香が名づけた『父の終焉日記』という書名で広く知られている。引用が多岐にわたっている点がその特徴の一つでもあるが、特に(注2)『宝物集』からの抽出が大半を占めている。「任他五濁悪世の境界」や「五逆罪」など仏教用語を駆使している点からすでに念仏信徒の信仰心を厚くしていたと考えられる。また(注3)『法華経』の經文からの引用も多いところから浄土真宗の門徒としての意識を強くして書かれたものと思われる。江戸の生活を引き払って信濃柏原に定住することになる十三年前のことである。

『父の終焉日記』とは別に「別記」がある。この文章は「生ひ立ちの記」とされて一茶の経歴を知る上での貴重な資料でもある。またこの記には「日記余白」があり諸書からの抄出が丹念に記されている。これも「日記

別記」を書いた後に『父の終焉日記』を補完する物として抄出して手控えとしたものらしく引用は『新古今集』^{〔注4〕}『穩妻表紙』『法華経』『涅槃経』『万葉集』『徒然草』『莊子』『列子』『雨月物語』『古今集』『今昔物語』など諸書に及んでいる。「日記別記」については相当な誇張があるが、祖母かなとの愛情の交錯が詳述されているので長い引用になるが引くこととする。

春去り来れば、はた農作の介となりて、昼は日終、菜つみ草かり、馬の口とりて、夜は夜すがら、窓の下の月の明りに杳打ち、わらぢ作りて、文まなぶのいとまもなかりけり。

明和九年五月十日、後の母男子仙六を生めり、此時信之は九歳になんなりけり。いたましひ哉、此日より信之、弟仙六の抱守りに、春の暮れをそきも、はこによだれに衣を絞り、秋の暮れはやきもいばりに肌のかわくときなかりき。仙六むづかる時は、わざとなんあやしめるとく父母にうたがはれ、杖のうきめ当てらるゝ事曰に百度、月に八千度、一とせ三百五十九日、目のはれざる日もなかりし。憑と思ふは老婆一人介けとなり給ふに、餓鬼の地蔵を見つけたるがごとく、あやうき難はのがれたり。皆是宿世の業縁、昔一天万乗之君さへ、井の底に埋められんとせしためしあれば、たとへ此身は千々に砕かるとも、身体髪膚皆父母の借りもの、何をか悔ん、何をかうらまん。

寒天の暁に陌上の霜雪に面をさらし、三伏の夕べ松下の虻蚊に脛をこらし、弟守事春秋五とせ也。しかるに、明和五年八月十四日、杖柱とたのみし老婆、黄泉の人と成り消えたまふ。有為転変、会者定離は生あるもののならひにしあれど、我身にとりては、闇夜に灯失へる心地して、酒に酔へるがごとく、虚舟に浮めるがごとし。且暮称名のみをちからに日をおくる。三七日も過る此に及、信之は多やみの神に見入られて、惣心火の中に焦かるゝがごとし。かくて命またくあらじと枕元につき添ふ人々は念仏を進め、信之も息の通はん程は御仏号をとなへつゝ、明るもくるゝもしらざりき。なんの人より天才の生まれつきなれば、父もをし

まじ、母もかなしまじと思へど、親に先立身の本意なさや。それとても天のなせるわざなるべし。老少不常の此世はかりのちぎり、不生不滅の国に生れて、長く老いをつくすべしと。

この文章によると庇護者祖母かなが他界した直後に「えやみの神に見入られて惣心火の中に焦かるゝがごとし。かくて命またくあらじ」と周囲の人々より見放されるほどの重病を患っている。このことは従来見落とされていたことであるが、実は極めて重要なことと思われる。『父の終焉日記』に描かれている継母さつの阿修羅のごとき鬼姥のような人間像は実は^{〔注6〕}『袋草子』などの継母像を借りて多分に文学的に脚色されている、とするのが従来の解釈であった。これは一茶五十七歳の時に書かれた文政二年（一八一九）の『おらが春』の記述にもそのいじめの様が執拗に描かれていることにも由来している。栗の木が芽を出して一尺ほど伸びると大雪で折れてしまう。翌春にまた芽をかるうじて一尺ばかりのぼすがまた折れてしまう。「ことし七年の星霜を累ぬれど花咲き実入る力なく、されど此世の縁尽きざれば、枯れも果ずして生涯一尺程にて生きて居るといふばかりなるべし」と栗の一本に我が身をたとえ、継母の非行に堪える自分を暗示させた後に「我又さの通り、梅の魁に生れながら茨の遅生へに地をせばめられつつ、鬼ばばの山の山おろしに吹折られ吹折られて、晴れ晴れしき世界に芽を出す日は一日もなく、ことし五十七年、露の玉の緒の今迄切れざるもふしぎ也」と書いてそのいきさつを記述して誇張している。更に幼少のころに弟仙六を背負わされている姿を「大方の人混じりもせずしてうらの畠に木・萱など積みたる片陰に踞りて、長の日くらしぬ。我身ながらも哀也けれ」と記し、いかに寂しい思い、辛い思いをしたか、ということを縷縷書きつらねている。

このような記述から、「継母への呪い、継母の陰険さ、非行虐待の毎日」がこれでもかこれでもかと描かれている。こうした点からそれは一茶の作られた自画像と解されてきた。『おらが春』では幼少のころの辛い日々を

語った後に〔注6〕「我ときて遊べや親のない雀・六歳・弥太郎」の句がある。この句も文化十一年（一八一四）一茶五十二歳の作であるから多分には作が見えている。こうした後に旅先で見聞したのか、或いは土地に伝わる伝承を記録したものが継母の物語を書いて幼児「さと」の記録に及んでいる。こうした構成力は実に見事な筆致といふべきである。

継母の残忍さ、無慈悲さを語ることは恐らく「説経節」の「さんせう太夫」に依ったものと思われる。森鷗外は説経節から小説『山椒太夫』を書いた。直江の浦の人買い男は、母親を佐渡へ売ってしまい、佐渡で買った人は母親の眼をつぶして盲いにし、粟干し場に来る鳥を負わせている。一方子供の姉弟は丹後の由良の山椒大夫という長者に買われて朝早くから姉は海辺へ潮汲みに、弟は山へ芝刈りに行かされるといふくである。森鷗外の『山椒太夫』は説経節の冒頭部が欠落している。子供らの父親岩城の判官正氏の人柄と家の事情を鷗外は省略し、越後の国の直江の浦に辿りついた場面から書き出している。岩城の正氏は冤罪によって筑紫の安楽寺に流され、安寿と厨子王がこの父のいる筑紫に岩城の国から会いにゆきたいと言う。姉弟の父を恋う心にはだされた母親は、子供らの乳母でもあった姥をつれて国を立つ。途中幾夜も野宿を重ね、直江の浦にまで辿りつく、という冒頭部がある。横山重氏の〔注7〕『説経正本集』には次のようにある。

ただいま語り申す御物語、国を申さば丹後の国、金焼き地藏の御本地を、あらあら説きたてひろめ申すに、これも一度は人間にておはします。人間にての御本地をお尋ね申すに、国を申さば奥州の日の本の將軍、岩城の判官正氏殿にて、諸事のあはれをとどめたり。この正氏殿と申すは、情の強いによつて、筑紫安楽寺へ流され給い、憂き思いを召されておわします。

鷗外の小説『山椒太夫』が省略した〔注8〕門付け説経が語るこの部分がない。人買いの悲しい物語ではあるが、丹後の金焼き地藏尊の御利益を語り申しますという前置きがある。説経節の特徴である丹後の金焼き地藏尊

の霊力が語られるのである。やがて四人の主従の姉弟は二艘の船に別々に乗せられ離れ離れに売られてゆく。姥の「うわたき」はこの仔細を見て取つて、とても生きられないとばかり投身すると、母も続いて身を投げようとするが子供達のことを思つて入水をおぼしめる。「船頭このよし聞くよりも、なにと申すぞ。一人こそは損にすると二人まで損にはすまい、とて持つたる櫂にて打ち伏せて、船梁に結びつけて、蝦夷が島へぞ売つたりけり。蝦夷が島の商人は、能がない、職がないと足手の筋を断ち切つて、日に一合を服して粟の鳥を追うておはします。これは御台の物語り。」と説き語る。さすがに鷗外も母親が蝦夷へ売られて「能がない、手職をもたぬ」とて女の手足の筋まで切り取り、粟に来る鳥を追わせて一日一合を喰わせていた、などとは語れなかつたのであろう。説経節の本旨はこの世の地獄は人間が作るものだとこのことを語つて聞かせ、それがいかに残酷なものであるかを、説経節は説教してみせるのである。

安寿と厨子王は由良の山椒太夫のもとに売られるが、「越後の国直井の浦から売り初められ、それがしあまりのものの憂さに、静かに数えてみてあれば、この太夫殿までは七十五転に売られたが」と説経師が語るように七十五人の人手に買われて売られることになっている。山椒太夫の屋敷では姉は潮汲み、弟は三荷の芝刈りを命じられる。あまりの辛さ哀しさに一度は自害を思いとどまり、一度は脱走を計画するが、姉弟のはかりごとを山椒太夫の息子の三郎に立ち聞きされて、安寿は額に、厨子王は頬面に炭火で焼いた焼き鏝で顔に印を押されてしまうのである。「姉は弟にすがりつき、弟は姉にすがりつつ、流涕焦がれてお泣きある」と説経師は語り続ける。ただ一人この物語で慈悲心を持つていたのが三郎の兄二郎で、この二郎が自分は喰わずに袂に隠し持つていた自分の握り飯を飢えた姉弟の小屋にもつて来てくれるのである。「さんせう太夫」の説経節にはもう一人の慈悲者がいる。姉弟が二人一緒に自害をして果てようと決意した時、それを押しとどめ助けてくれたのが伊勢の小萩という女性である。小萩は大和の宇陀郡に生れ、伊勢の二見が浦から売られて山椒太夫のところへ来るま

でに四十二箇所も転々としてきた女性である。山椒太夫のもとに売られることになったその由は、「継母の中の讒奏により伊勢の国二見が浦より売られて」と語り、また継母がここでも強調されている。

小萩は安寿と厨子王とが汐汲浜で身投げをしそうになるのを助け、論じて太夫の家へ連れ帰るが、またまた太夫は二人に食事を与えない。飢えた二人に小萩は自分の握り飯をそつと分け与えるのである。説経師が執拗に姉弟の境遇を攻め語るのは（注）「かちえ」を客にわからせたいからである。若狭、信濃、能登などでは「飢え」を「かちえ」とも言った。親と離れて暮らす子が腹が空くとこの「かちえ」或いは「かつえ」ともいったが、「カチ栗」のように塊って身の内に残る。腹の中に残った「かちえ」はなまなかのことで凍となって体が温もらず冷え切ってしまうのである。飢えていた姉弟に自分の飯を分けて与えてやるのが二郎と小萩なのである。二人にとって伊勢の小萩の登場はどんなにうれしかったことであろう。「あらいたはしや姉弟は、さて去年の正月までは御浪人とは申したが、伊達の郡の信夫の庄で、殿原たちや上藤に」と説経師が語ると、客は一層姉弟の「かちえ」に同情し涙を絞ったことであつたろう。江戸時代にはかろうじて麦飯が喰えたり、辛うじて米麦飯を喰えた人々が大方で、疲弊した村では喰えぬ子供も沢山いた。そうした子供たちの多くは自力宗派や、天台、門徒などの寺院に幼児のころから貰われてこれを「童行喝食」といふ一種の「口べらし」となつた。また幼くて沙弥になつた子を「馱鳥沙弥」ともいふた。一茶も十五歳で江戸に奉公に出されたのも継母との折り合いの悪さもあつたが一種の「口べらし」という理由もあつたのであろう。

一茶は『おらが春』で栗の若木を継母にいじめられる自分の姿として綴っている。「鬼ばば山の山おろしに吹き折られ吹き折られて、晴れ晴れしき世界に芽を出す日は一日もなく、今年五十七年、露の玉の緒の今迄切れざるもふしぎ也」と書いた後に継母に虐げられている和歌や俳句を並べた後に大和の国に伝わる話としての一文を書き添えている。

なでしこやままはは木々の日陰花

一茶

子ばかりの蒲団に芦の穂綿哉
うつくしきまま子の顔の蠅打たん
なげけとて蚊さへ寝させぬまま子哉
まま子をもいたはる嫁の名をとげて
継母のまた口走る夜の雨
わづかなる世をまま母に偽られ
竹の雪はらふは風のまま子哉
朝夕におひかぶさりし目の上の辛夷も花の盛りなりけり
うぐいすよなどさはなきそ乳やほしき小鍋やほしき母や恋しき
貫之娘

宗鑑
紅雪
未達
芭蕉
未達
風流
正勝
一茶

このような継母にいじめられる様子を描いた句を集めている。こうした点から考えると確かに後妻との折り合いは良かったとはいえないものがあったに違いない。前述した説経節の『さんせう太夫』にも安寿と厨子王の母に食事を与えなかったり、姉弟に食事を与えず「かちえ」を思わせたりにする描写があまたあつた。一茶も『父の終焉日記』の中で祖母かなが他界した後に病に患つたことを記している。前述したように継母のいぢめ、残忍さを描くのに『さんせう太夫』から得たと書いたが、或いは継母のいぢめは寡収による食糧不足から一茶が「かちえ」になつたことを意味しているのではないだろうか。父弥五兵衛は北信濃の宿場町柏原の農民で早くに父を失いながらも良く努め、享保末年に分家に出ている。一茶が生れる前には相当に苦勞をしたようであるが、宝暦十三年（一七六三）当時は田持高三石四斗余り、畑二石六斗余りで村内中位の位置にあつたと思われる。そのようなことから一茶の病は後妻さつとの感情のもつれに加えて飢えによる「かちえ」であつたと考えられる。そのため一茶は『おらが春』で継母にいじめられる句を書きつらねた後にこれも『さんせう太夫』の説経節の「小萩の章」に類似した物語を書き込んだものと思われるのである。

『さんせう太夫』の厨子王はある日山に芝刈りに行き、姉から勧められ

たように逃亡して国分寺に辿りつく。寺の奥から聖が出てきて追っ手の三郎と問答になり、遂に寺中を探し回るが聖が籠に入れて屋根の垂木に吊るしてかくまったので見つからずに済むのである。この場面も説経節では最も高揚するところである。三郎と太夫と聖との問答かけひきに迫真性がある。三郎が「童を御出しあれ。童を御出ししないものならば、身にも及ばぬ、大誓文を御立てあらば由良の港へ戻ろうぞ」と聖を脅迫すると、「童としては知らねども誓文を立ていならば立て申すべし。そもそもこの法師と申すは、この国のものでなし。国を申さば大和の国、宇陀の郡の者なるが、七歳の時に播磨の書写へ上り、十歳にて髪を剃り」と語りだす。こうしてお経の羅列が始まるのは説経節で言う「くどき」の文言であるが、厨子王を助けた小萩も聖も所在が大和国の宇陀の出身であった。そのようなことから大和国には説経節による伝承も多く伝わっていたのであろう。大和宇陀の地藏菩薩は語りで知られている。一茶は継母の意地悪さを述べるのに引用している。

昔、大和国立田村にむくつけき女ありて、まゝ子の咽を十日程ほしてより、飯を一碗見せびらかしていふやう、「是をあの石地藏のたべたらんには、汝にもとらせん」とあるに、まゝ子はひだるさたへがたく、石仏の袖にすがりて、しかじかねがひけるに、ふしぎやな、石仏大口を開けてむしむし喰ひ給ふに、さすがのまゝ母の角もぼつきり折れて、それより我うめる子とへだてなくはごくみけるとなん。其地藏菩薩今にありて、折折りの供物たへざりけり。

ぼた餅や藪の仏も春の風

一茶

説経節の『さんせう太夫』で厨子王と安寿が顔に焼いた鉄棒を押し当てられて、十文字の焼印の折檻をうけた時に身代わりになってくれたのが地藏菩薩であり、厨子王が山から脱走し寺にかくまわれ三郎に槍で突かれた時もまた地藏様が身代わりになり、三郎の槍先を折ってしまうのも地藏菩薩である。説経節の本筋は地藏菩薩の霊験を説くためのものであり、『さ

んせう太夫』は、丹後の由良の「金焼き地藏菩薩」の霊力を語る物語なのである。姉弟が肌身離さず持っている地藏菩薩のお守りも二人の宿縁を語る道具なのである。いかなる折檻にも、いかなる責苦にも、いつも身代わりとなって二人を助けるのが地藏菩薩なのである。親子の情愛を歌い上げて仏恩を感じさせるのが説経節なのである。佐渡に売られて鳥追いとなっている母親と丹後守護職となった厨子王との再会を導くのも地藏菩薩なのである。俗信家の一茶は説経節を子供の時に聞いていたのである。越後の誓女は越後高田から丹後に行ったし、山一つ越えて信濃までやってきたのである。それゆえに一茶は「亡き母や海見る度に見る度に」と詠んだのであった。佐渡で盲となった母親と再会できた厨子王を一茶はどれほどうらやましく思ったことであろう。『父の終焉日記』の弟仙六が生れたくだりに「仙六むずかる時は、わざとなんあやしめるごとく父母にうたがはれ、杖のうき目当てらること日に百度、月に八千度、一とせ三百五十九日、目のはれざる日もなかりし」と継子の身の辛さを強調した後に、「老婆一人介けとなり給ふに、餓鬼の地藏を見つけたるごとくあやふき難をのがれたり」と地藏菩薩の霊験のごとくに書き記したのである。また「信之は急やみの神に見入られて、惣心火の中に焦かるるがごとし」と書いたのは実際祖母を失った悲しみと、継母のいじめによる「かつえ」の病であったのであろうが、厨子王が三郎の責苦の焼き鏝を顔に当てられるが如くに描いているのである。一茶も地藏菩薩の篤信家であった。

二、父と子供達

享和元年（一八〇一）の四月、父弥五兵衛が農作業中に傷寒によつてたおれ、一茶は専心看病に努めたが病気は悪化の一途をたどり、五月二十一日六十九歳で他界した。その発病から葬儀、初七日に到るまでの様子を後日に細叙した記録が^{〔注10〕}『父の終焉日記』であった。前記したように本作は単なる日記にとどまらず私小説的な構成と内容を持っており、創作意識

が極めて顕著である。内容は「本文」「別記」「書入」の三部からなり未完の草稿である。中心は父の看病にこと寄せる一茶の自己宣伝と、継母と弟仙六との遺産分配の確執に相当の分量を費やしている。またこの遺産分配に絡む継母と弟の醜い所業が克明に記されている。従来からこのため遺産分割に絡む肉親相克の醜悪な一面のみが強調されてきたが、よく読むともう一つの父子愛の文学として読むことも可能である。

父の喉の渴きの訴えに継母が井戸水をむやみにすすめる所行に怒って、自ら湯冷ましを飲ませ、細心の注意で看病する一茶の動静が多少の誇張を交えて活写されている。遺産の分配は死期を悟った父によって四月二十九日に宣言された。父は早くから江戸奉公に出した一茶に負い目を感じていたらしく、一日も早く帰郷させて柏原に定住させたいと願っていたらしく、一茶もその父の願いを容れて定住することを考えていた。一茶に病床の父が語りかける場面は圧巻であるので引用をする。少々長い文章でもあ

る。

六日天晴れたれば、伏してばかりも退屈にやおぼしめさんと夜着打たため、よりかからせ申したりきに、こしかたの物語など初給ひけり。

「抑、汝は三歳の時より母に後れやや長になりにつけても、後の母の中むつまじからず、日々に魂をいたため、夜々に心火をもやし、心のやすき時はなかりき。ふとおもひけるやうは、一所にありなばいつ迄もかくありなん、一度故郷はなしたらば、はた、したはしき事もやあるべきと、十四歳と云春、はろばろの江戸へはおもふかせたりき。あはれよ所の親は、今三とせ四とせ過たらんは、家を任せ、汝にも安堵させ、我等も行末をたのしむべきに、としはも行かぬ瘦骨に荒奉公させ、つれなき親とも思ひつらめ。皆是すくせの因縁とあきらめよや。今年は我も二十四輩に身をなして、かの地にして一度汝にめぐりあひ、相果つるとも汝が手を借らんと思ひしに、こたびはるばる来りて、かゝる看病こそは浅からざるゑにしあれ。此度今往生をとげたりとも、何の悔かあらん。」とはらはらと涙落し給ふに、一茶は只打ちふして物も得言はず。夏の消

えやらぬ不二の雪より厚く、紅ひの二入より深き父の恩を、つき添ふ事もならで、只うかめる雲のごとく、東にあるかと思へば西にさすらひ、光陰は坂上に輪をころがすごとく、今とし二十五年になりぬ。首は白霜をいたたく迄、親のそばを遠ざかりぬる事、五逆罪とも是に過ぎてんやと、心にふし拌み、我涙おとしなば、やまひいよよ重らせ給ふべき、顔おしぬぐひ打笑ひ、「させる事心に思ひ給はで、はやく快気なし給へ」と薬を進めける。「やがてすこやかに給はば、われ元の弥太郎となり、草ぎり土ほりて心を安めん。今迄の為体ゆるし給へ」といへば父はかぎりなく悦び給ひき。

このような記述が後になされたものであつたとしても父は一茶を江戸奉公に出してしまったことを常に心に悔いていたようである。こうした近世人の肉親の愛と死をテーマにした作品は他に例を見ない。安永六年（一七七七）の春、十五歳の一茶を同郷人に託して江戸に旅立たせた一茶の父親の気持ちはいかばかりであつたであろう。しおしおと家を出る一茶を父は牟礼まで送って「毒なるものはたうべなよ。人にあしざまにおもはれるなよ。とみに帰りてすこやかなる顔をふたたび我に見せよ」とねんごろに涙を浮かべて語りかける様はこれほど辛い父の真情と子を愛す姿をいとおめて読むものをして涙を禁じえない。一茶の奉公先については具体的にはいまだ判明していないが、やがて俳諧をたしなむ大きな商家に奉公をしたのであろう。^{〔注目〕}一説には千葉県松戸市馬橋の大川という油問屋であるといわれている。近世の家族制度と家督相続制度は特に長男を優遇した。長男でありながら継母との不仲によつて家を離れねばならなかつた一茶は結果として深く継母を恨むこととなりその性格と文学にも微妙な影を落すことになるのであるが、帰郷してからの継母との折り合いはそれほど険悪なものではなく結構仲の良い暮らしをしている。継母さつは文政十二年一茶の死後二年の後に八十歳にて没している。『父の終焉日記』には一茶の父への思いやりの心が随所に見える。母の看病記や妻の看病記などは近代

文学作品には多くあるが、父の看病日記は意外に少ない。川端康成の「十六歳の日記」くらいである。父子愛の物語を一茶が遺産分割をもくろんで随所に父を思う自己宣伝を書いたこともまた事実であろうが、肉親の愛情、殊に父子愛については一茶自身が自分の子どもに満腔の愛情を寄せている点から偽りではなかったことに思い至らされるのである。

父が最後に食べたい、といった季節外れの梨を探しに遠く善光寺町まで走り回る姿は家族の絆の深さを感じさせる良い文章である。これも部分的に引用紹介してみたい。

十日晴れ、しきりにありの実をたうべたきとむづかり給へば、此辺のゆかりあるもなきもひたしきかぎり、富たる家、心あたりある門、聞尽し尋捜し尽すといへども、ありのみ一つたくはへたる人としもなく、夏さへ寂しき山里なりき。——略——

辰の刻ばかりに善光寺に着く。——略——抑々此地は御仏の浄土にしあれば、肆は軒をあらそひ、幌は風にひるがへり、入る人、いづる人、国々よりはるばる歩をはこびて、未来成仏をねがはぬ人もなく、おのれはけふ父の命をうけて御薬使、はた梨を捜しに来つるなれば、此役済まざらんうちは御仏も遙拝して、天をかけり地を潜りてなりとも、梨ひとつ得まほしく、ある程の乾物店、ある程の青物店あおものを足を空にしてかけ巡るに、悲しさは更に片われ一つありとさかゆる人もなかりき。昔雪中に筍を掘り、氷上に魚を求めしためしもあるに我梨ひとつ得ることあたはざるは、皇天我を捨て給ふや、仏神我を見かぎり給ふや。一世ばかりの不孝にはあらじ。父はさぞ梨を待ちて居給はん。此ままに帰りて父をなんとなくさめんとおもへば胸せきふさがり、忍び落つる涙は大道を潤し、ゆききの人の狂者と笑はんもはづかしく、しばらく手を組み首をうなだれて心をしづめける。此の地になきものいづちにかあらん。

臨終間近い人に最後の親孝行を行うことは孝道の極みである。多くは最後と思われる望みを聞いてそれをかなえてあげることが言うが、大抵は食

べ物を求めてあげることである。父弥五兵衛は「梨を食べたい」といったので一茶は梨を求めて善光寺町に行つてまで求め続けた。翌日は越後高田まで行つて求めていた。高田は新潟県上越市高田であるから柏原からは四十キロも離れている。一茶は「たくはへたる梨」と捜し求めているのである。或いは「乾物店」「青物店」を求めて歩くのである。父弥五兵衛は一茶の甲斐甲斐しい看病もむなしく病状は回復せず、悪化の一途をたどるばかりなのであるが、それだからこそ父の欲しがる梨を求め続けるのである。しかしその甲斐もなく弥五兵衛は五月二十一日に生涯を閉じることとなる。陰暦五月二十一日であるから今日では早生りの梨はもう食べることが出来る。或いは促成栽培のビニールハウスで結果したものなら容易く手に入れることも出来る。現代の農業技術、それに外国産の輸入果物に頼れば求めてない果実果物は無い。食べ物において現代では終命間近な人が望むものをかなえてあげられないということはない。そうした点からも現代では病人の看護という点においてもはるかに省力化された時代になったということもできる。

それでは父弥五兵衛は、実際には有りもしない要求をしたのであろうか。或いはもう意識朦朧として一茶に無理な願いを言いつけたのであろうか。一茶はまず隣近所の人々に梨の蓄えがあるかを尋ねている。次に富みたる家や心当たりのある家を探している。「富裕な人」ならばもっているかもしれない。蓄えているかもしれないという梨なのである。そして「心あたりある家」とあるところから、この家では梨を栽培している農家ということになる。このように捜し求める場所が明示されているということ、父が食べたいと申している梨はこの時期に全く存在しないということではなかったのである。雪中に筍を求む、氷上に魚を求む、と書いた後に「我梨ひとつ得ることあたはず」と記している。雪中の筍はほればすでに地中の地茎には育ち始めている。氷上の魚は氷魚といって凍った湖に穴を開けて釣ることが出来る。榛名湖や諏訪湖の氷魚釣りは古くから行われている。それならばこの時期に梨が存在することを一茶は知っていて求め歩

いているのである。「乾物店」「青物店」とも言っている。

俳諧歳時記には「晩三吉」という梨が冬の季語として記載されている。この梨は原種に近い梨で、晩生の貯蔵梨を言う。そのことから歳時記では「冬の梨」とも言っている。「現代歳時記」では「冬の梨」は十一月ごろに収穫できる「新高」や「白雪」という最晩生の梨を言う近代の季語で扱う梨を指している。一茶が求めた梨は一名「三吉梨」といい大型で不整球な五百グラムぐらいの大きさの梨である。緑を帯びた褐色をしており果点は不鮮明なものである。貯蔵用の梨で現在も冬期から初夏ごろまで冷暗所に保存しておけば食することができる。古い品種の梨で新潟が原産であることから一茶は「翌日は高田へ参りて、尋ね来たりて参らすべし」と記しているのである。後に一茶が柏原に帰住すると越後高田から後藤甫外、大稜長肅、十日町の幽嘯などが門弟となっている。この梨は明治中頃より盛んに栽培されるようになっていく。現在は南信州松川産で品種改良されて更に保存が効く「南水」という梨として売られている。古い江戸時代の歳時記に出てくる「冬の梨」がこの「三吉」という季題となっている梨なのであり、一茶はこの梨を求めて善光寺までくまなく探し回っているのである。有りそうでなかなか手に入らない、というのが一茶の作意の妙である。

父弥五兵衛は熱心な門徒で毎朝仏壇に向かうことを日課としていたほどであったので、一茶に遺産分割を訳して念仏を唱えて没した。遺産分割については別項で述べたので省略するが、当時の法令と習慣に従って分割された。一茶は特に父に深い愛情を抱いていたので次のような句を残している。

寝すがたの蠅追ふもけふかぎり哉
 生き残るわれにかかるや草の露
 父ありて明ぼの見たし青田原
 ひとりなは我星ならん天の川
 手招きは人の父也秋の暮

一茶

〃

〃

露じもや丘の雀もちちとよぶ

〃

『享和句帖』には完成期の作品に比べこのような父を懐かしんだり、孤独を嘆じたりする作品が多い。一茶はこの年より村に伝馬役金を納めていたことから、この父の死の床で約束された遺産の分割は三者とも本心であつたと思われる。『父の終焉日記』の末尾は次のように記されている。

父のいまそかりける時、我に妻むかへしてとどめよと人に云ひ、おのれにも戒められしが、ある人の中に、聞かぬふりに空耳したる人あり。ことに六欲兼備の輩、遺言にそふかは。はた顔あかめあふ、本意なければ又元の雲水と成りて、いかなる岩木のはざまにも身をひそめ、風をいとひ、雨をしのがんにもするすみの身ひとつ、何のはちかあるべき。しかあれど、云で止なんも又父の仰にそむく。一略一いなや。返しなきに、無下に里出せんも、亡父の心にそぶかと、しめ野分るを談じあひけるに、父の遺言守るとなれば、母屋の人のさしづに任せて、其日はやみぬ。

父の遺言を履行するという約束を取り付けた一茶は九月になると再び江戸に戻った。遺産折半はそのままにして役両だけはきちんと納め権利を確保しておいたのである。これから十三年後の文化十一年（一八一四）四月十一日母方の縁者常田「きく」と結婚をした。「きく」は信濃町赤川の常田久右衛門の娘で二十八歳、一茶五十二歳であった。一茶はきくとの間に三男一女をもうけるが、「我菊やなりにもふりにもかまわずに」と一茶が詠んだようによく働いてくれた。しかし江戸時代の幼児の死亡率は高く三男一女の愛児たちは相次いで他界してしまった。中でも二男石太郎は母の背中であ息するといういたましい亡くなり方であった。その次に生れた三男金三郎は、菊の産後の肥立ちが思わしくなかつたので、他家に託したが、その託し先で乳のかわりに白湯を飲ませていたことから栄養失調で亡くなつてしまった。一茶は石太郎のために「石太郎を悼む」を、金三郎のために「金三郎を憐れむ」という俳文をそれぞれ執筆して自らの心を慰め

ている。一茶にとつて命を伝えるということは俳諧以上に大切であった。

一茶は早く母を失い、継母の虐待で苦しんだ末江戸に奉公し、長い漂泊生活を送りながら温かい家庭生活の実現を夢に見ていた。そうした一茶が五十四歳の時にもうけた長男千太郎は僅か生後一か月で早逝してしまつた。この後にも得たつかの間の幸せを文政二年（一八一九）に一年間の日記体句文集『おらが春』にまとめている。長女『さと』を愛育する『きく』の姿を精細に描いた「添乳」の一文には、其の妻や娘に向ける一茶の暖かいまなざしが描かれ、家庭や家族のあり方の本来の姿を髣髴とさせるものがある。近世を代表する「家族愛」を描いた名文と称することができよう。しかし、その愛しい女兒も一年余りの後に痘瘡によつて奪われてしまふのである。「添乳」の後に収められている「露の世」の一文はやはり涙なくしては読めない文章である。『おらが春』はわずか二才で世を去つたこの愛しい子に対する追悼集であるが、生前は刊行にいたらず没後二十五年を経た嘉永五年（一八五二）にようやく公にされている。文学作品としても高い評価を得、その版木は確認できるだけでもおよそ五度に涉つて出版され続け、関東大震災によつて絶版に到っている。

『おらが春』は、自らの境涯を自伝的に構成した一書で、当時の一般的撰集や随筆集と比べて著しく個性的で一茶の獨創性が顕著である。序文で「歳旦の心境」を記した後に自己の俳諧師として体験した事や「感想」をまず記している。その後「継子としての境涯」と「吾子への愛情」を描き、結びはまた「体験と感想」を書き、跋文として「歳暮の心境」を描いて一年の記録としている。極めて意図性が高く一茶の文筆の高みを示している。特に愛娘さとの愛と死は中心的なテーマで本書のクライマックスをなしている。継子としてのおのれの境涯と満一歳余で他界してしまつた長女さとへの愛、その不幸がもたらした「あなたまかせ」のあるがままの生を受け入れようとする真宗的境涯が描かれている。特に「妙専寺のたか丸」の死を描いた後に「添乳」の一文が置かれているのは絶妙でもある。

こぞの夏、竹植うる日のころうき節茂きうき世に生まれたる娘、おろ

かにしてもものにさとかれとて、名をさととよぶ。ことし誕生日祝ふころほひより、てうちてうちあは、天窓でんてん、かぶりふりながら、おなじ子どもの風車といふものをもてるを、しきりに欲しがりてむづかれば、とみにとらせけるを、やがてむしやむしやぶつて捨て、露程の執念なく、直に外のものに心うつりて、そこらにある茶碗を打破りつ、それもただちに倦て、障子のうす紙をめりめりむしるに、よくしたよくしたとほむれば誠と思ひ、きやらきやらと笑ひてひたむしりにむしりぬ。心のうち一点の塵もなく、名月のきらきらしく清く見ゆれば、迹なき俳優見るやうに、なかなか心の皺を伸ばしぬ。

又人の来りて、わんわんはどこにといへば犬に指さし、かあかあと問へば鳥にゆびさすさま、口もとより爪先迄愛嬌こぼれてあひらしく、いはば春の初草に胡蝶の戯るよりもやさしくなん覺え侍る。

此おさな仏の守りし給ひけん、迨夜の夕暮れに持仏堂に蠟燭てらして鑰打ちならせば、どこに居てもいそがはしく這よりて、さわらびのちいさき手を合わせてなんむなんむと唱ふ声、しほらしく、ゆかしく、なつかしく殊勝也。それにつけてもおのれかしらにはいくらの霜をいただき額にはしはの波の寄せ来る齡にて、弥陀のたのむすべもしらでうかうか月日を費やすことこそ二つ子の手前もはづかしけれと思ふも其座を退けば、はや地獄の種を蒔て、膝にむらがる蠅をにくみ、膳を巡る蚊をそしりつつ、あまつさへ仏のいましめ酒を呑む。

折から門に月さしていと涼しく、外に童の踊の声のすれば、ただちに小椀投げ捨て片いざりにいざり出て、声をあげ手真似してうれしげなるをみるにつけつつ、いつしかかれをもふり分髪のためになして、おどらせて見たらんには、二十五菩薩の管弦よりもはるかまさりて興あるわざならんと、我身につもる老を忘れてうさをなんはらしける。

かく日すがらをじかの角のつかの間も手足をうごかさずといふ事なくて、遊びつかれる物から朝は日のたける迄眠る。其うちばかりは母は正月と思ひ、飯焚、そこら掃かたづけて団扇ひらひら汗をさまして、閨に

泣声のするを目の覚る相図とさだめ、手かしく抱き起こして、うらの
 畠に尿やりて、乳房あてがえはずは吸いながら、むな板のあたりを
 打たたきて、にこにこ笑ひ顔を作るに、母は長々胎内のくるしびも日々
 の襦袢の穢らしきもほとほと忘れて、衣のうらの玉を得たるやうになで
 さすりて一入よるこぶありさまなりけらし。

蚤の迹かぞへながらに添乳哉

一茶

『おらが春』の成立時は『七番日記』によれば文政元年に計画されてい
 ることが矢羽勝幸氏の研究で明らかであるが、翌二年にいたって長女の死
 に遭遇、やむなく変更して現行の形に収まったものと思われる。改編は長
 女急逝の嘆きから立ち直った文政二年九月頃から着手されたもののように
 ある。本文は私小説風の文体であるが、長女さとに寄せる愛は誠に無邪気
 なもので「目に入れても痛くない」我が子の可愛く愛しい姿を描いて白眉
 である。さとの死は他の三人の愛児の死に比して女兒であり、また二歳近
 くまで育った可愛い盛りの時期の死であったので一茶の悲しみはいかばか
 りであつたらうと推察することができる。愛児の死は一茶にとって書かな
 くてはならないテーマでもあつたのである。

一茶は文化十一年（一八一四）四月に母方宮沢家の縁戚であつた信濃町
 赤川の常田きくと結婚すると、その二年後の四月、文化十三年（一八一
 六）四月に長男千太郎が誕生したが僅か一ヶ月で死亡してしまつた。文政
 元年（一八一八）五月に長女さとが生れたが、翌文政二年五月にさとも早
 逝してしまふ。すると今度は文政三年（一八二〇）十月十六日に一茶は豊
 野町浅野の雪道で転倒しそのまま中風にかかつてしまふ。重病にならな
 かつたのは幸いだったが以後体力は落ちてしまつた上に不幸も連続する。
 文政四年一月に石太郎が窒息死すると、四月には妻のきくが痛風になり病
 臥するところとなる。文政六年五月にきくは病没する。その間赤渋村の富
 右衛門に金三郎を預けるが十二月に三男の金三郎も死んでしまつた。一茶
 は文政六年には葬儀を二度も出し次々と不幸に見舞われることになるので

ある。文政六年五月に一茶は「金三郎を憐れむ」という俳文を書いて赤渋
 村富右衛門を骨の髄まで憎んだり、恨んだりする文章を書いた。これを読
 んだ萩原井泉水は「愛するものは何処までも愛するが、憎む者はどこまで
 も憎む」という氣質を持つてしていると記している。「腹は背にひつついて其
 間うす板のごとく、骨はによきによき高く角石山に薄霜降りたるに似た
 り。声はかすれ蚊の鳴に等しく、手足は細り鉄釘のように、目は瞳なく明
 きたる儘にて、瞬ちから抜けて反眼にして空をにらみ、軽きこと空蟬の風
 に飛び、水を放たれたる魚の片息つくばかり也」と金三郎の衰弱を書きつ
 らねている。富右衛門家の墓がある洞仙寺の住職に富右衛門の事を聞いた
 〔注12〕千曲山人によると富右衛門は其れほどの悪人ではなく、乳母を斡旋
 した赤渋の女が余り乳が出ないことを一茶も知っていたのではないかと
 も云い、また富右衛門も其れを知つていて親切心で預けを勧めたのだらう
 と書いている。洞仙寺の小山住職によると富右衛門家の墓には「金三郎の
 墓」なる供養塔が伝承されており、富右衛門が人知れずこっそりと無名の
 供養塔を建立し菩提を弔つていたので、と話している。一茶はこのよう
 に金三郎の有様を記した後更に痛烈な筆誅を加えている。

いかに人面獣心富右衛門ならばとて、人の目をかすめて盗む衣食など
 とはことかはりて、生あるものをかくもむごく、なまけなくつれなくふ
 るまいしもの哉と、知るも知らぬも皆々泪ほろほろなでさすりぬ。あや
 つ金をむさぼりてなせるや、恨みをふくみていたせるや、風上に置くも
 おそろしくなん。はつかあまりの乳断、いかばかりくるしからんと、小
 児の心を思いはかりて、ちち恋し乳恋しとやみの虫の泣き明かしけん
 きくらしけん。

富右衛門は朴訥山人の荒男であつたようであるが、一茶が金三郎の瘦せ
 衰えた姿を見て筆誅を加えた文章の一部である。この文章は別稿があり初
 案草稿とされている。この別稿と成稿との違いは、「赤渋の女は乳さらさ
 らぬからに、小児日々瘦せる。とくとり戻してよ」という人の言葉が

入っている。これがあるということは一茶がしばしば耳にしていたということの意味する。一茶は耳にしながら、不便に思いながら「ここらならず打捨てて」おいたのである。これを成案をなす推敲の過程で全て削ってしまったのである。つまり乳母の不正を知りつつ放任しておいた一茶側の失態を成稿では全て削っていることは、乳母を際立たせる事を目的とし、悪役に仕立てることを目論んだのである。この乳母は二子を生んだが生後まもなく二人を亡くしてしまった。富右衛門は三ヶ月も前に子を無くした娘の乳が細くなっていたことを知らなかったとも考えられるのである。洞仙寺の小山住職は「純真無垢で世話好きで親切があだになったのであろう」とも云っている。富右衛門家はこの後村の人々から何やかやといわれ吉五郎と云う人が明治二十六年に没したのを最後に家は廃絶に到ってしまったと千曲山人は言っている。一茶がいかに家族を大事にし、子供をもうけることに腐心したかを物語っている。一茶の家庭や家族のことは見ていくと、これからそこには少子化社会を迎える日本にとって、子供はどういうくしむべきかという姿が良く見えてくるのである。引用ばかりで恐縮であるが一茶が子供たちをどのように見ていたかを紹介しながら擱筆する。文政五年（一八二二）から同八年までの自筆句日記に『文政句帖』というものがあつた。文政五年から八年まではいままで述べたように、初妻きくや三男金三郎を失い、自らも中風の再発など多くの不幸が一茶を見舞った時期に当たっている。しかし作句の数は盛時の時と変わらず三千五百余の句を収めている。一茶の強靱な精神を見ることが出来る。

田中川原といふところは、田のくろ、あるいは石の下よりめでたき湯のむくむくと出て、いたずらに流れちりぬ。あはれ此ものの常の所に俄に出たらんには、地獄にて仏にあふよりもうれしからましを、此里人は湯とはいはざりけり。一略一貧しきものをやしなふは、湯の湧く所にしくはあらじ。夜のほのぼの明きて、鳥の声と等しくがぼと起きて十ばかりなるを頭として、兄は弟を負い、姉は妹を抱きつつ、闇を出て、

呼はりあひて、それに引きつづきて、其から走り走りて湯桁に飛び入りつつ今玄冬素雪のころなるに丸裸にて狂い育ちに育つものから、おのづから病なく、ふとくたくましく見ゆ。さるからその親々、衣着せる思ひも薄かるべし。

子どもらが雪喰いながら湯治かな

一茶

これは「田中川原の記」という一文であるが、子供たちが雪の中丸裸になって田の中、川の中で遊んでいる姿を描いている。無論一茶の故郷柏原から少し離れたところには湯田中温泉という有名な温泉郷もあるので、柏原の村裾を流れる田中川にも湯が自然と湧いていたのであろう。子供らの薄着は真実は家が貧しいからなのであるが、一茶は温泉の恩恵として描いている。雪が降る中湧いては流れている川の流れからは温泉と同じような湯けぶりが白々と盛んに流れていたことであろう。雪をほおばりながら真冬の川の中で遊び興じる子供たちの姿が目に見えるようである。

【注】

〔1〕矢羽勝幸『小林一茶』（勉誠出版、二〇〇四、十、十五）もともと草稿のまま伝えられたため題名もなかった。従来「みとり日記」などとも言われていたが大正十一年に東松露香の校訂本によって「父の終焉日記」の名が定着した。

〔2〕『宝物集』一茶はこの書にある経文、或いは「天竺の人の兄弟金を持ちて山を通る話」などの『今昔物語集』、或いは『宝物集』に収められている白居易の詩、『孝子伝』『後拾遺』『易経』など多数引用している。「断金の交」「軽大臣」などみな『宝物集』に見える『易経』や『和漢三才図絵』など、ほとんどどこから引用したとするのが通説である

〔3〕『法華経』妙法蓮華経とも言う。大乘経の一つで天台宗、日蓮宗はこれによっている。八巻もしくは七巻あり、一茶はほとんどこれに

よって引用をしている。「宗法なりとてゆるさず」といつているのは、念仏一途の真宗ではそれ以外の方法は許されていないとするのであるが、「盲亀のうき木にあへしもこれにいかで増さるべきか」という言葉をししばし用いている。この語は「涅槃経」の一説である。

〈4〉『稻妻表紙』（文政三年、一八〇六）山東京伝の怪談集である。「昔話 稻妻表紙」という書物である。例幣使街道を通り熊谷宿を後にして利根川を渡って玉村か旧芝根村辺りで一泊した一夜の不思議を語ったものであるが、この奇話はおおむねこの読本に基づいているため、一茶の実体験ではなく虚構の話とされている。一茶は日記にもこのような虚構を随所に織り込んで巧みに文章を構成している。

〈5〉『袋草子』（保元三年、一一五八）藤原清輔。このころまでに成立したと思われる書であるが、一説には翌年の（平治元年、一一五九）の頃ともある。この年のものは「袋草子上巻」となっている。「本朝小序集」もこの年に成っている。一茶はこうした書物にも目を通して引用している。実に勤勉家でもあったといえる。

〈6〉「我と来て遊べや親のない雀」『おらが春』では「六歳弥太郎」となっているがこの作ははるか後年の作品で、孤独癖の少年時代を回想するのに都合のよい作品としたのである。一茶の育った家庭も一般家庭によく見られる「嫁と姑」の問題があり、祖母に溺愛されながらもその両者の間で一茶の心はもみくちゃにされたものと思われる。

〈7〉『説経かるかや』（寛永八年、一六三一）、『説経をぐり』（寛永六年、一六二九）に刊行されたものと思われる。これらを集成したものが『説経正本集』で横山重氏が編集したものといわれている。「天下一説経節佐渡七太夫正本」といわれている。説経には「をぐり」「萱」「信徳丸」「さんせう太夫」「あいこの若」とあり、これを五説経といった。太宰春台はこれを説経浄瑠璃より愛し、瞽女の語るものを最上とし特に「独語」と呼んだ。

〈8〉「門付説経」盲目の瞽女がひとりの目の見える瞽女に引かれて各

家々を訪ねては説経を説いていた。「葛の葉」が多く、狐が人間の子を産む「信太妻」が有名である。特に冬期に越後から各国を巡回しながらこれらの説経をして喜捨を乞うている。これら説経の特徴は「丹後の金焼き地藏尊の霊力」から語り始めた。最後の瞽女は越後高田の杉本チイさんが有名で人間国宝に指定されたがもうなくなった。

〈9〉「かちえ」飢餓の事を言う。食不足で体が疲弊し灼熱悪寒を繰り返して死に到る。かつては戦国時代に食糧を絶えさせたことから「かちえ」改め「かちえ」といった。単なる飢えだけではなくそれが体にたまって凍てさせることから「かちえ」といった。

〈10〉『父の終焉日記』享和元年一茶三十九歳の夏に久しぶりに柏原に帰郷した折、父が悪性の傷寒にかかり六十九歳でこの世を去った時に看病をした手記。一茶の経歴を知る上での資料として貴重となっている。また読書遍歴を知る上での資料としても貴重である。特に「別記」はいままであまり注目されていなかった。

〈11〉千葉県松戸市小金の永妻可長などかという説もあるが、今では松戸市馬橋の大川という油問屋の主人で大川平右衛門という人物であると考えられている。柏日庵立砂と号した俳人である。江戸から両総地方に勢力を持っていた葛飾派の宗匠森田元夢の高弟とされている。一茶は生涯に渡って立砂と親交を持っていた。

〈12〉千曲山人。長野県塩尻市の俳人で一九二八年の生まれ。一茶研究家。『一茶に惹かれて』の著書がある。二〇〇四年一月二十五日の発行で文芸書房から刊行されている。特に長野県に住していられることから、足で見、耳で聞いた聞き書きの著書が多い。

（受理日：二〇〇七年三月一日）